

「別れというすがた」

4月の終わりと5月の初めに、友人を二人亡くしました。一人は熊本の天草高校時代の音楽仲間で、もう一人は京都大谷大学時代の寮の仲間です。二人とも昭和という時代に生を受け、癌という病気を縁として、人生を終えてゆきました。

高校時代の友人は息を引き取る最後まで、家族友人達から「頑張れ、頑張れ」と言われ続けたそうです。最後に口にしたカレーライス「うまか」と、この上ないような顔をして食べて逝ったそうです。

大学時代の友人は、臓器のいたるところに癌が出来、内臓のほとんどを摘出し、その後は医師の力を借りず、最後は白湯（さゆ）だけを飲む暮らしを続けながら亡くなっていきました。

それぞれの縁の中で生きて、人生の結果、息を引き取って逝きました。世間で偉いと言われるどのような人もそうでない人も、お金持ちもそうでない人も、健康な人もそうでない人も、外国の人も日本人も、癌であろうとも津波に飲み込まれても、それぞれの縁（えにし）の中で生きて死んでいきます。友人二人とも、迷いの世界を逃げることなく、思い惑う迷いの世界を生ききってお浄土に還って行きました。私もいづれまいります。彼らと再会できる日を、楽しんで待ちませんが、思う惑う迷いの人生を逃げないで、生ききってゆこうと思えます。

親鸞聖人は『浄土文類聚鈔（じょうどもんるいじゅしょう）』の中で、思い迷う人生を引き受けず、誤魔化して生きる人を「流転（るてん）の愚夫（ぐふ）」と言われ、思い迷う人生に真向かいになり、その人生を引き受けて生きる人を「常没（じょうもつ）の凡夫人（ぼんぶにん）」と示しておられます。